
黒犬異世界奇譚

黒い悪魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒犬異世界奇譚

【Zコード】

Z9362Y

【作者名】

黒い悪魔

【あらすじ】

平凡な会社員、西崎真也はトラックに突き飛ばされてご臨終。が、気づいたら黒毛のワンちゃんに転生！？しかも転生先は異世界だった。犬に転生しちゃった主人公と、そのうち加わる愉快な仲間の物語。異世界モノを読みあさっているうちに無性に書きくなつたので投稿。そのうち主人公がチートになるかもしないので苦手な方はご注意を・・・。

プロローグ

俺の名前は西崎眞也。冴えない21歳会社員だった。特技はどこでも寝られる事。環境適応力が高いと自分では思っている。ちなみに恋人はない。趣味は読書でラノベから推理小説まで手広く読んでいて、音楽もそこそこ好きな、それこそどこにでもいるような人間だ。

そんな俺は、いつものように晩酌をして床に着いたら冷蔵庫を開けるものの、田舎でのビールもとい、発泡酒が無いので近くのコンビニに買いに行くことにした。

これが運の呪い・・・といつか命の呪いだった。

500円以上購入できるのみになるクジでビール（これは本物）が当たったので、終始口キゲンで夜の道路を愛車のママチャリを漕いでいた。

自宅のアパートとコンビニまでのルートには大きな国道があつて、それを渡らなければならぬ。いつものように横断歩道をキコキコと渡つている時だった。

ギヤリギヤリと不快な音と共にペダルが動かなくなつた。

チャリのチーンが絡まつたのだ。

「つまー直すのメンドクサー」

とそんなことも言つてられないので、下車しチヨーンをいじる俺。
さほど時間もからずにチヨーンは直った。

と、信号が点滅してたのでわざと渡り歩ひつとした時だった。

横からの強烈な光に目がくらむ。そこには止まる気配が感じられな
いトラックが迫ってきていた。

(は?)

一瞬、思考が停止する。その間は「コンマ一秒もなかつたと思つ。

俺の体が激痛と浮遊感を感じた。目前に迫り来るコンクリートを見
つめながら、久しぶりにビールが飲めたのになあ、なんて下らない
ことを思つた。

そして意識が刈り取られる。俺、西崎真也はこの時をもって、死ん
だ。

ハズだ。そう、俺は死んだはずなのだ。あんなスピードで大型トラ
ックに突っ込まれ、宙を舞い、あまつさえコンクリに頭から落ちて

いつたのだ。助かるはずがない。

なのに気づいたら意識があつた。

俺の目には、どこまでも広がる青い空が映っていた。体の自由はどうやら利かないみたいだ。仕方がないからずつと空を眺めていた。

鳥が気持ちよさそうに空を泳いでいた。排気ガスの感じられない、爽やかな風が頬を撫でていく。

どれくらいつただろうか、まるで急に金縛りから覚めたみたいに体が言うことを聞くようになった。ずっと地面に仰向けで寝転がっていたから背中が痛くてしかたない。

そして俺は、4本の足で立ち上がった。

え？ 4本の足ってどうこうこと？ 自分で立ち上がりについて、なぜ4本の足で立っているのか理解できなかつた。

た。
恐る恐る、自分の前足を見てみる。艶やかな黒い毛皮に覆われてい

『なんだとかおおおおおおおおおおおお！？』

と叫んだつもりが、喉から発せられるのは、

『アラフ・ハーナー』

と、犬の叫び語。

その瞬間、俺は悟った。

そう、俺は犬に転生してしまったのだ。

第一話 転生速攻あの世行きコース

一旦状況を整理しなければ。

俺はトラックに轢かれて死んだ。これは間違いない。あの痛みは本物だ。が、気づいたら犬になっていた。鏡やら何やらで確認しないから、実際は犬ではなくかもしれないが、四足の犬っぽい何かに転生しれしまったのは確実だ。さっきから声に出して見ても

「わん！」

『「じんにじけーー！」』

とか、

「ぐうーん・・・」

『「じめんなさい・・・』』

とかにしか発音されない。別に意図して犬語をしゃべっているわけではない。まるで、声にでる瞬間に自動翻訳されているみたいだ。

そして、俺が今立っている場所は、明らかに日本じゃない。どこまでも続いている野原と、遠くに見える山々。鬱蒼とした森も見受けられる。申し訳程度にある獸道とほとんど変わらないような道が、遠くに見える街へとつながっているみたいだ。轍や、蹄の後が見えることからおそらく馬車でも通っているのだろう。俺はその道の真中に倒れていた。道幅は2メートルぐらいはあるだろう。犬は鼻が効く代わりに目が悪いと聞いたことがあるが、俺はすこぶるよく見

える。生前・・・といふか人間だつた頃より遙かに良い。

明らかに日本じゃない。ひょっとしたら地球ですらないのかもしけないと思えてきた。さすがにそれは小説の読み過ぎだと思うが・・・。

と、何やら嫌な臭いがしてきた。これは・・・獸のよつた臭いか？ぐるりと見回してみると、何者かの影は見当たらぬ。嫌な予感がしたので逃げようとした時だつた。

一際臭いが強くなつたと思つたら、黒い影が急に現れた。

(は?)

思考停止していると瞬く間にその黒い影に囲まれた。

「グルルウウウ」

『エサダ、エサダ』『ハラヘッタ』『ワソウ、タベル』

などと物騒な声を上げるテカイわんちゃんたちだつた。5頭ぐらいだろうか。よくわからないが、同じ犬だからなのか相手の言つていることが理解できる。

(やつぱり、俺は犬なんだア)

などと感慨にふけつている場合ではない。奴らは明らかに俺のことをエサだと思つてゐる。が、逃げようにも完璧に退路を塞がれている。

「わ、わん、くうん！」

『ま、待て、話し合おうじやありませんか！』

と意思の疎通を図つてみる。

「ガルウウー！」

『タベルー！』

どうやら意思の挿通は無理みたい・・・。やべえ、転生して速攻あの世行きロースかも・・・。

じりじりと包囲が狭まつてくる。そして、一斉に俺へと飛びかかる！

（おこおこねー！ー！ーまじかよー！？）

俺は恐怖のあまり固く目を開じた。

第一話 銀髪の戦乙女

（ああ、終わった。これで俺の第一の人生も終了かあ・・・。短かつたなあ・・・）

固く目を閉じ、来るべき衝撃に耐えようと身を硬くする。なにやら、ふわりと優しい香りがした。獣達の嫌な匂いの中、そんな香りが出てきたのが、あまりにも不思議で、目を開ける。

「ハアアツ！-！」

そこに俺は戦乙女を見た。

流れるような斬撃が恐ろしい犬たちを斬り伏せていく。突然の奇襲に犬たちはなすすべなく斬られてゆく。

美しい銀線と彼女の立ち回り。まるで剣舞を踊っているようだった。飛び散る血飛沫さえ、彼女の剣舞をより美しくするための演出みたいだ。

（綺麗だ・・・）

危機的状況にも係わらず、俺は彼女の戦いに目を奪われた。

あとう間に2頭を仕留めた彼女は、

「次は誰が相手かな？弱いものいじめする奴は容赦はしないよ

と俺を底うように立つ。おお、なんという頼もしい背中！

風に吹かれ、なびく銀髪。右手には細身の剣が握られていた。

防具は・・・アレは皮か何かだろうか?あまり重装備には見えない。おそらく動きやすさを重視しているのだろう。

「グルルウ」「ガウツ!-!」

『チカズクナ』『ジャマスルナ!-!』

そんな声が聞こえてくる。

「まだやる気?」

やれやれといった風に肩を竦める彼女。

「仕方が無いなあ。さつきは気配を消してたから奇襲に成功したものの・・・」

剣を構え直す、銀髪の戦乙女。見た感じ、俺より年齢は結構低そうだ。16ぐらいだろうか?

「さすがに3匹同時は仕留め切れないか・・・」

「グルルル」

犬たちは牙を剥き出しに唸つている。

「ならば・・・我が手に宿るは激情、火炎!」

左手を前に突きつけると、魔方陣のようなものが出でてきた。

(つて、魔方陣！？)

すると、魔方陣が輝きを放ち、炎が吹き出して犬たちの足元を焼いた。

「きやんきやん！！」

『一一ゲロー！』

犬たちは炎に驚いたのか、一目散に逃げていった。

「つとに、なんで同じ犬だつてのにグラドッグは餌としか考えられないんだろうね」

剣についた血糊を拭きながらひらひらを振り向く。

「怖くなかったかい？大丈夫、私は敵じゃないよ」

剣を腰の鞘に収めた彼女はしゃがんで、俺と田線を合わせようとする。

瞳は赤く、銀髪と相まってとてもきれいだ。そして、すっと通った鼻に、白い肌。

「わふーん・・・」

『超絶美少女・・・』

思わず声が漏れた。

「おうおう、怖かったんだねー」

といつて抱き上げてくれる。

(「わおおおおおおおお！」)

やべえ、犬に転生して良かつた！
全力で尻尾をフリフリ。

「はははっそんなに嬉しいか！」

クシャクシャに撫で回される俺。イジられるよりもイジりたい俺だが、この際そんなことはどうでもいい。

正直、抱きあげられているという事実もわかるしながら、命が助かつたことに感激していた。彼女は俺の命の恩人だ。

「ワン口、両親はどうした？ つてそんなこと聞いても分からぬいか」

「ふぬふぬ」

いよいよ、という意味を込めて首を振る。あ、今胸に当たった。革
鎧（こ）じだつたけど。

「ワン口、私の言葉わかるの？」

「わん！」

『『もちろんー』』

目を丸くする彼女。

「ひょっとして、高位の魔獣かなんかの子供？ ここまでまではつきり私の言ひこと分かるなんて・・・」

「わん？」

『はい?』

「さすがにそういうことは分からぬいか」

「ウイノマジュウ? ひょつとして高位の魔獸つてことか? さすがにそれはないと思つなあ。てか、俺に親なんかいるのか? 気づいたらこの姿で道端に寝ていたんだけど。ひょつとして、俺はイレギュラーな存在なのかもしけない。

体が世界に馴染めなくて消失なんて、よくある話じやないか。ま、まあ、1時間近く(体感だけど)いるのに気分が悪くなったり、体が軽くなったり透けたりしていながら大丈夫だろう。

「私の言葉がわかるなら、一応自己紹介しておくか」

俺を地面に下ろす。そして、しゃがみんで田を見つめてくる。

「私の名前はセシリア。セシリア・クレントだよ」

「わうん!」

『いい名前です!』

しかし、この子・・・もといセシリアは人の目をちゃんと見て話す子だなあ。あ、今は人じやなくて犬か。

しばらく俺の顔を見ていたセシリア。

(や、そんなに見つめられると恥ずかしいじゃないか)

が、その澄んだ赤い瞳からは田を離すこと出来なかつた。

「なあ、ワン! 君は一人ぼっちなんだよね?」

「わん」

『うん』

じっと俺の目を見てくる彼女。

「なら、私と一緒に旅をしない？」

そういうて俺に手を差し伸べる。

とびっきりの笑顔も一緒に俺へ向けてくれる。

「私も独りで旅を続けるのは寂しいしね。きっと、楽しいよ！ワン
コが見たことないような景色がこの世界には広がっているんだよ！
！…それを一緒に見れたらモット楽しいと思わない？」

どう？とばかりに小首を傾げるセシリア。こんな犬っこに真摯に
言葉を投げかけてくるのは、俺が人語を理解できると分かってる以
上にこの子が純粋なんだろう。

俺はこの世界では一人じゃ何も出来ない弱い存在だ。世界のことも
何も知らない。それに俺自身、この世界のことをもつと知りたいと
思った。一緒に旅するなど、渡りに船だらう。

まあ、単純にセシリアのことが気に入ったというのもある。可愛い
し、強いし。ストライクゾーンで真ん中ではないが、ガツチリ俺の
心を掴むだけの魅力はある。

そんな一抹の下心も込みで俺は、

「わふん！」

『 よりじべー。』

ぽふ、と差し伸ばされた手に手をする。

こうして、一人と一匹の旅が始まった。

第三話 ネーミングセンス

「やううだ、ワシコの名前を決めなくちゃ！」

俺と一緒に旅することを約束したセシリアはポンと手を打つ。

「こつまでもワシコだつたら可哀想だしね」

歩みを止め、どんなのがいいかな？と腕を組みうんうん唸る銀髪美少女。可愛い。癒されるなあ・・・。

俺とセシリアは平原の街テリアンへと向かっていた。俺が倒れていたところから遠くに見えた街がそうだ。なんでも、色々な街からの物資が集まる大陸の中心地的存在で非常に賑わっているとのこと。セシリアも初めて訪れるらしく、凄く楽しみだそうだ。大陸やら周辺の街については教えてくれなかつた。こういう時に、自分から質問ができないのは不便だ。

「やういや、ワシコはオス？メス？」

・・・どうなんだろ？中身は間違いなくオスだが、外側までオスとは限らない。

「・・・ちょいと失礼」

俺に手を伸ばすセシリア。

「まあ、まあかーー？」

「あー、あやうんーー！」

『まあ、まてえいーー』

と暴れてみるも、

「まあまあ、ちょっと確かめるだけだから」

といつて、強引に持ち上げられる。女性とはいって、戦士である彼女に力で敵ははずもく、どだい犬の体で出せる力などたかが知れている。

「ほほう、男の子でしたか。失礼しました」

「くぅん・・・」

『ぐあーー』

りょ、陵辱された・・・。むづむづ嫁にいけない・・・。

「なはは、やっぱり知性があると羞恥心もあるんだねえ

とじしゃがんで俺の頭をぐしげじと撫でる。

「涙まで溜めひきつて。『めん』『めん』

お詫びとばかりに頭やら首やらをわしゃわしゃされね。俺はビビから子犬ほどの大きさのようで、小柄な彼女の手でも大きく感じた。

「男の子と分かったことだし、強そうな名前を付けよひじやないか

「わうん」

『お願いします』

俺はもう、この世界で生きることを決めた。生前使っていた名前で本での名だ。ここに生きていくなれば、ここでの名をもうおつ。

そんな俺の一大決心をよそに彼女は楽しげに名前を考えていた。

が、この名付け作戦は、予想以上に長引いた。

「へんな名...」

「がぶ

「これもダメえ！？」

最初は、セシリアが名付けるならどんな名前でも受け入れようと思った。これから旅を共にする仲間なのだから、適当な名前を付けないだろうと思っていたし。

といひがどつこい。

彼女にはネーミングセンスが皆無だった。

「よし、今日からお前はクロだ！」

開口一番、これだよ。どんだけセンスないんだよ。
フフンと偉そうに指を立てていたので、拒否の意をこめてそのまま指に
ガブリ。

その後も何回か案が出たのだが、どれも酷いものばかりだった。

「レオン!」「
「がぶ」

俺は猫科じゃなくて犬科です。

「クロゲー!」「
「がぶ」

和牛じやありません。

「漆黒の牙!」「

「がぶ」

厨一かよ。しかもどつかのRPGで聞いたことあるぞ、それ。

「ワンワン!」「
「がぶり」「
「いたい・・・」

投げやりにも程があります。

てか、痛いならいちいち指を立てるなよ。躊躇まれるの分かつてると
ろり。

とまあ、いじつな感じ。

「「つ「う、頑固だよおー。」

「「ま「ひー。」

『「キートーすゞだー。』

中々決まりず、いのままだと一向に街に進まなことこいつとで歩きながら決めることに。

「名付けるのがこんなに大変だとは・・・」

俺も別にまともなのならいいんだよ～でもむか、それにしてネーミングセンスひどくないかい？

とつとつセシリアの限界が来たのか、

「だあー もひへ、お手上げ！」

と考えることを放棄してしまった。

「お前えー選り好みし過ぎなんだよー」

と強めにわしゃわしゃされる。

そんなこと聞かれてもなあ・・・。セシリアのセンスがなさすぎるんだよ。

そんなこんなで、結局名前は決まりず、一人でのぼほんと街に向かっている。

天気は快晴。空はどこまでも広がっている。

こっちの世界にも太陽はあるんだなあ、でも地球のよりも大きい気がする。なんてことを考えながら、セシリアの後をトコトコついていく。

「そろそろ休憩しようか。さつきから歩き続けてるし、私もさつきの戦闘でだいぶ疲れちゃった」

近くの木陰に移動する。セシリアは木にもたれ掛かるように座った。腰につけている剣もベルト」と外す。俺はその隣におすわり。

この平原にはあちらーちらに木が見受けられる。近くには無いが、遠くの方には大きな森も見える。セシリアに出会い前に見つけた森とは別なものだ。

「早く美味しい料理がたべたいなーっと。はい、干し肉」「むぐむぐ」

セシリアがバックから出した干し肉を分けてもらいつ。余談だが、こ

のバツク、実は俺が探し当てたものだ。俺を助けに来たときに、戦闘に邪魔なバツクをそちら辺に投げ捨てたらしいのだが、セシリ亞はどうに投げたのか覚えていなかつた。

そこで活躍したのが俺の嗅覚というわけだ。

軽く腹ごしらえしつつ雲の動きなんかをぼんやり一人で眺める。優しい風がそよそよと吹いていて、その音も耳に心地いい。とても、ゆつたりと落ち着いた時間だ。

「そうだ

何や？ セシリ亞がカバンをゴソゴソし始めた。

「じゅじゅーん」

取り出したのは木の棒みたいな。なんだこれ？ と見ていると、

「これはねえ、笛なんだよ！ 私のおじいちゃんが作ってくれたんだ」

そう言つて彼女はその笛を吹いた。

その笛の音はとても澄んでいて優しげな音色だった。さわさわと風が奏でる音と、彼女の吹く笛の音がコーラスしているかのようだつた。

暖かで、心を落ち着かせるその音色は風にのつてどこまでも届いていきそうだ。

どれくらいセシリ亞の笛に聞き惚れていたろうつか。彼女の笛が止む。なんだか、心が癒された感じだ。とてもゆつたりとした時間だった。

「やっぱ・・・こんなのがんびりしたら夜になっちゃうー。」

セシリ亞が急に立ち上がる。

「まよいー！急ぐよー一夜になつたら魔獸たちがウヨウヨし始めるー。」

「わうーん！？」

『なんだつてーー！？』

慌てて笛をバックにしまうセシリ亞。ヒ、そいである臭いがしてきた。

「これは・・・馬？」

「わんー。」

『セシリ亞！』

セシリ亞を呼ぶ。名前を読んでいることは分からぬが、俺の今までにない強い声に何事かと俺を見る。

「なに？」

臭いのする方を向き、吠える。

「もしかして、敵？」

真剣な眼差しになり、手早く剣のベルトを腰につける。

と、パカラッパカラッと蹄の音が聞こえてくる。それにガラガラと何かを引く音も聞こえてくる。

「！」の音は・・・

徐々にその音が大きくなり、音の発生源も見えてくる。

そう、馬車だ。

「やつたー！」これに乗せてもらえば陽が沈む前に街に行けるー。」

「わんー！」

『ラッキーー』

どうやら危険でいっぱいな夜を過いさなくて済みそうだ。

第四話 馬車の中で

ガタゴトと馬車がゆく。

運良く、ちょうどディリアンへと向かっている商人の馬車に乗せてもらえた。ヘルキンスというふくよかなおっさん商人で、主に織物を扱っているそうだ。馬車は大きな作りで、人が一人増えた所でなんの問題もなかった。

御者台には護衛のルイというブラウンヘアのあんちゃんがいる。
冒険者だといふ。

どうやら、この世界には冒険者なるものがいるらしい。俺の予想が外れていなければ、ギルドもあるはずだ。

まあ、あちらこちらに魔物はいるし、行商人やら街への移動の際には何かと入用なんだろう。自分の身は自分で守れなんて、限界があるし。戦闘のスペシャリストが必要とされるのも当然か。

ん、何やらヘルキンスとセシリ亞が盛り上がっているみたいだ。

「して、セシリ亞さんはどこから来たんですかい？」

「私はセントレリアから来ました。出身はリーランド王国です」

「なるほど。銀髪でしたからもしゃと思つたんですが、やはりノース大陸の方でしたか」

「ノースに来たことがあるのですか？」

「ええ、若い頃に何度か。ゼリア大陸の者にはちと寒すぎましたがな。がつはつはつ」

豪快に笑つおつさん。なんか、これぞ商人つて感じの人だな。

にしても、幾つかの地名が出ていたな。話の内容からすると、俺たちが今いる場所はゼリアと呼ばれる大陸か。んで、その他にもノースという大陸があつてそこはセシリアの故郷。

うーん・・・やはりただ話を聞いているだけでは大した情報は得られないなあー

まあ、犬だから大陸のことやら国のことなど知らなくとも全く問題はないけど。

「ところで、そのペットは? ズいぶん美しい毛並みだ」

お、なんだか褒められたぞ? 毛並みを褒められるのがこんなに嬉しいとは。

尻尾をぱたぱた。

「喜んでるみたいですね。この子はさつき拾つたんです。グラドッグに食べられそうになつていたところを保護したんです」

「ほう。それにしては随分とあなたに懐いているみたいだ。騒ぎもしない。あなたの入柄の良さがわかりますな」

「そんな、この子がとっても頭がいいだけですよ。私の言うことが分かるみたいなんです」

「これはまた。ひょっとしたら高位の魔獣の子かもしませんな」

キラリとヘルキンスの目が光る。

こいつ、俺を売り飛ばすつもりか? 確かに高位の魔獣の子なんかそういう手に入る物じゃないだろうし、結構な値がつくだろうけど・・・

・。

「『Jの子は私のお供です。あげませんよ』

ぎゅっと俺を抱くセシリ亞。暖かい。

「がつはつは！これはこれは、失礼。癖でしてね。こうやって珍しいものを見つけると売りたくなるのが商人の性でして」

「絶対にダメです！」

「いや、本当に失敬。それはそつと、本当にこの子が高位の魔獸の子だとしたら厄介ですね」

ん？なんで厄介なんだ？

「この子を取り戻しにやつて来るやもしけない」

「そこは大丈夫です。この子には両親がいないみたいで。いたら、道端に放つて置くなんて考えられないし・・・」

「それはその子から聞いたのですかな？」

「はい。両親はいるのと訊いたら首を横にふりました」

「ふむ。両親のいない魔獸か、神の氣まぐれで魔力が宿つた犬か」「どちらにせよ、魔力を持つていてことだけは変わりないです」

ゑ？俺って魔力持ってるの？マジで？魔法とか使えちゃうわけ？

「あなたは冒険者のですし、デリアンについたらギルドに魔獸使いの登録をしたほうが良いですな」

「私は別にこの子を従えているわけじゃ・・・」

「まあまあ、便宜上ですよ。魔獸使いとして登録しておけば、魔獸OKな宿で割引も効くし、魔獸使いに人気な、剛力や俊足、鉄壁といった補助魔法も割引されますぞ？」

「うつ・・・それはかなり魅力的・・・」

「まあ、難点といえば、パーティーが組みにくいでしようかな?如何せん、『魔獣は魔獣』という考え方を持つている方が少なからずいますからな。信用できんということでしょうな」

「そんな偏見を持っている人とは組みたくないのでちょうどいいです」

「がつはつは、これは中々に肝が座つたお嬢さんだ」

セシリ亞は純粋だな。犬の俺と対等であるうとするなんて。まあ、人語を理解できるってこともあるんだろうけど。けど、俺が例え人語が理解できなくとも、セシリ亞は俺と対等であるうとするんだろうなと、なんとなく思った。

「随分と冒険者に詳しいんですね」

俺のそんなことを思つていろいろ話は進む。

「私はこれでも昔、ギルドの職員をやつていましてね。最初はそんな気はなかつたんですがな、ギルドに訪れる冒険者たちを見ていると自分も世界を回つてみたくなりまして」

「なるほど、それで行商人に」

「ええ、戦うのは苦手でしたし、冒険者にはなれないと思つたので、商人なら世界を回りながら仕事が出来ると思ったもので」

「ところがどつこい、そう簡単に商人としてやつていける筈もなく、始めは分からぬことばかりで右往左往しておりましてな・・・・・」

「ところがどつこい、そう簡単に商人としてやつていける筈もなく、始めは分からぬことばかりで右往左往しておりましてな・・・・・」

L

あ、長そうな話がはじまつたぞ。

一
れ

話は結構面白かつたのだが、どうやら疲れていたみたいで寝てしまつたようだ。セシリアの膝の上で。至福。

外はもう夕方だ。嫌な臭いがする。おそらく夜にうじやうじや出てくる魔物たちの臭いだろう。幸いまだ近くにいないみたいだけど。

「で、みつせりと、わの生地を畳むる」とができたのである。

「うわあ、そんな場所があるんですね！」

「ええ。その時ばかりは終わつたと思いましたね」

そのセリフ3回ぐらいじゃないか?しかし、セシリアもよくそんなに食いつけるな。たしかに話は面白いけど。

その後もヘルキンスの話は続いた。このおしゃべりもよく話が出てくるな。

と、ガタンッと馬車が止まる。

どうやら街に着いたみたいだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9362y/>

黒犬異世界奇譚

2011年12月1日19時49分発行